同時バイリンガルにおける過去時制形態素と過去時制概念の発達
The development of past tense morpheme and the concept of deictic past in simultaneous bilinguals

森(三品) 聡美

Satomi Mishina-Mori

立教大学,
Rikkyo University
morisato@rikkyo.ac.jp,

Abstract

The current study investigates the relationship between the development of past tense morphology and the concept of deictic past in children acquiring Japanese and English simultaneously in the early stages of language development. Monthly recordings of spontaneous speech data of two young bilingual children were conducted for a year and transcribed. All the verbs with past-tense marking in both languages were analyzed to see when the children start to express temporal displacement in each language. Based on the results, the relationship between the acquisition of linguistic coding and conceptual development will be discussed.

Keywords — 日英バイリンガル, テンス・アスペクト、概念発達

1. はじめに

本稿では、日本語と英語を同時に習得しているバイリンガル幼児における時制形態素と時制概念の発達について検証する。これまでの主たる時制形態素発達の研究においては、形態素の出現は認知発達を反映していると考えられてきた（Weist 1986, 1989）。しかしながら、近年の研究では、過去時制形態素の使用そのものが過去の概念を表しているとは限らないことが示されている（Shirai & Miyata 2006）。本研究では、二言語を同時に習得している子供達の言語発達に注目し、言語発達初期（２～３歳）の長期的自然発話データにおいて、日本語と英語とで過去時制形態素の出現時期に差があることに基づき、過去時制をあらわす形態素と概念発達との関連性について考察する。

2. 過去時制形態素と過去の概念の発達

動詞のテンス・アスペクトを表す形態素の発達は、幼児の認知能力の発達と密接な関係があると考えられている。これまでの多くの研究においては、幼児の発話におけるテンス・アスペクト形態素の出現は、彼らが時制の概念をもつことの表れであり、逆に形態素使用が認められなければその概念をもたない、つまり言語形式の発達は認知発達を反映しているという前提のものに論じられてきている（Shirai & Miyata 2006）。例えば、Antinucci & Miller (1976), Bronchart & Sinclair (1973) は、子どもの言語発達の初期的段階においては、過去時制を表す形態素が共起する動詞は瞬間動詞に限られることを報告している。このことから、その時点での子どもの過去時制形態素は過去を表しているのではなく、動作の完了を表しているとし、従ってこの段階でこどもは過去の概念を持ち合わせてはいないと論じている。

また、Weist (1986、1989) は、様々な言語の発達研究を精査した上で時制概念が４つの段階を経て発達していくことを提案しており、言語形式の出現と時制概念の発達は一致して進んでいくと主張している。初期の発話時システム(Speech Time System) では、子どもが実際に話す時に出来事が限定されており、従って過去時制形態素の使用は見られない (およそ１歳前後)。次の出来事時間システム(Event Time System)では、話す時と出来事が起きる時を切り離すことが可能となり、主に過去時制形態を用いて過去の出来事を表現できる

ようになる（およそ１歳半から２歳頃）。更に発達が進むと制約的設定時間システム(Restricted Reference Time System)、そして自由設定時間システム(Free Reference Time System)となり、設定時を発話時から切り離すことでより自由な観点から時制表現が可能となっていく(３歳以降)。

しかし、Weist(1986, 1989)が提唱した発達段階を実際に検証すべく、過去時制形態素と過去の概念とが実際のどのように発達するかについていくつかの研究がなされているが(Nelson 1996, Shirai & Miyata 2006)、いずれも Weist のモデルを支持しない結果となっている。例えば Shirai & Miyata (2006)は、日本語の過去時制形態素（ーた）がどの段階から過去の概念を表現するようになるかについて調査した結果、形態素使用が認められてからそれが過去の概念を表す意味で使われるようになるまで時差があることを報告している。つまり、形態素の出現は必ずしも過去の概念の発達を示すものではないことがわかる。

また、もし過去時制形態素の出現がそのまま過去の概念の発達を示すとすると、時制をあらわすシステムが言語によって異なるのであれば、習得する言語によって時制概念の発達は異なることになる。時制概念の発達の言語間比較研究はこれまでも行われてきているが(Weist et al, 19987, 1999)、発達初期段階の子ども達に焦点を当てたものは少ない。また、モノリンガルにおける研究がほとんどであり、二言語を習得する子ども達についての研究は皆無である。

3. 同時バイリンガルの言語発達

生後間もない頃から二言語を同時に習得するいわゆる同時バイリンガルの子ども達の言語発達研究は 1970 年代以降活発に行われるようになり、一定の条件下において言語間の相互作用も確認されているものの（Dopke 1990, Muller & Hulk 2001）、基本的には二言語は発達の初期段階からそれぞれほぼ独立して発達するという共通理解に至っている（De Houwer 1990, Paradis & Genesee 1996）。

二つの言語システムが独立して発達する証拠の一つとして、各言語における同等の文法項目の出現時期が同じこどもの中で異なるという現象が挙げられる。それぞれの言語のモノリンガル児において同等の文法項目の出現時期が異なる場合、その２言語を習得するバイリンガル幼児においても各言語のモノリンガル幼児と同じタイムスケジュールで文法項目が発達する現象で、リードラグパターンとも呼ばれる(Gawlitzek-Maiwald & Tracy 1996, Sinka & Schelletter 1998, Mishina-Mori 2002)。Mishina-Mori (2002)では、日本語と英語の同時バイリンガルの過去時制形態素の発達にリードラグパターンが見られることが報告されている。日本語の場合、過去を表わす「ーた」は、日本語モノリンガル児と同様に比較的早い段階（１歳半前後）で出現した一方、英語の過去時制形態素”ed”はやはり英語のモノリンガル児と同様にこれより遅れて（２歳半以降）出現している。

上記の研究では各言語の過去時制形態素の出現時期に差異があり、各言語のモノリンガル児と同じような発達過程を経ることから二言語の統語発達の独立性を証明しているが、各形態素が実際に過去の概念を表しているか、つまり Weist(1986, 1989)のモデルでいえば Event Time System の段階にあるか否かについては検証していない。そこで、本研究では、過去時制形態素の出現時期に加えて過去の概念が表現される時期を確認し、二つの異なる言語を同時に習得する子どもにおける過去時制の概念発達の実態を明らかにし、言語形式の発達と概念の発達との関係について考察する。

本研究における研究設問は以下の３つである：１）日英同時バイリンガル幼児のそれぞれの言語において、過去時制形態素はいつ出現するか。２）それぞれの言語において、過去の概念を表す過去時制形態素はいつ出現するか。それは形態素そのものの出現時期と一致するか。３）それぞれの言語において、過去の概念を表す過去時制形態素の出現時期に一致はみられる

か。

4. 調査方法

調査対象は、生後間もない頃から日本語と英語を家庭内で聞いて育つ日英同時バイリンガル幼児２名、リエとケン(Mishina 1997)で、２歳から３歳までの自然発話を月に１度、英語話者である父親、日本語話者である母親それぞれとのやりとりを録画・録音し、CHAT(MacWhinney 1995) ならびに JCHAT (Oshima-Takane & MacWhinney 1995)を用いて書き起こしたものをデータとする。それぞれの子どもの発話コーパスから過去形態素が付与されている動詞を抽出し、それぞれが完了の意味をあらわしているか、あるいは過去の意味を表しているかを、Shirai & Miyata (2006)の判定方法に基づき分別し、各言語について、過去形態素の出現時期、そして過去概念の出現時期を記録する。

5. 結果と考察

期待される結果としては、日本語の過去形態素は言語発達の初期から出現するが過去の概念は少し遅れて発達する。英語においては、形態素の出現自体が日本語より遅く、過去の概念の表現も更にそれより遅れて出現すると予想する。このことから、時制概念はそれぞれの言語体系固有のものとして発達すると考察する。

参考文献

[1] Antinucci, F., & Miller, R. (1976) “How children talk about what happened.” Journal of Child Language 3, 169-189.

[2] Bronchart, J. P. & Sinclair, H. (1973) “Time, Tense, and Aspect.” Cognition 2, 107-130.

[3] Dopke, S. (1999). “Cross-linguistic influences on the placement of negation and modal particles in simultaneous bilingualism.” Language Sciences 21, 143-175.

[4] Gawlitze-Maiwald, I. & Tacy, R. (1996) “Bilingual bootstrapping.” Linguistics 34, 901-926.

[5] MacWhinney, B. (1995) The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk. (second edition). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

[6] Mishina, S. (1997) Language Separation in Early Bilingual Development: A Longitudinal Study of Japanese/English Bilingual Children. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles, Los Angeles, CA.

[7] Mishina-Mori, S. (2002) “Language differentiation of the two languages in early bilingual development: A case study of Japanese/English bilingual children.” International Review of Applied Linguistics in Language Teaching, 40(3), 211-233.

[8] Müller, N., & Hulk, A. (2001) "Crosslinguistic influence in bilingual language acquisition: Italian and French as recipient languages.” Bilingualism: Language and Cognition 4(1), 1-21.

[9] Nelson, K. (1996) Language in Cognitive Development. Cambridge, Cambridge University Press.

[10] Oshima-Takane, Y. & MacWhinney, B. (1995) CHILDES Manual for Japanese. Montreal: McGill University.

[11] Paradis, J. & Genesee, F. (1996) “Syntactic acquisition in bilingual children: Autonomous or interdependent?” Studies in Second Language Acquisition 18, 1-25.

[12] Shirai, Y. & Miyata, S. (2006) “Does past tense marking indicate the acquisition of the concept of temporal displacement in children’s cognitive development?” First Language 26(1), 45-66.

[131 Sinka, I. & Schelletter, C. (1998) “Morphosyntactic development in bilingual children.” International Journal of Bilingualism 2(3), 301-326.

[14] Weist, R. M. (1986). “Tense and aspect.” In P Fletcher & M. Garman (Eds.), Language Acquisition (2nd Ed.) pp.356-374. Cambridge: Cambridge University Press.

[15] Weist, R. M. (1989) “Time concepts in

language and thought: Filling the Piagetian void from two to five years..” In I. Levin & D. Zakay (Eds.), Time and Human Cognition A Lifespan Perspective, pp.63-118. Amsterdam, Elsevier.

[16] Weist, R. M., Atanassova, M., Wysocka, H. & Pawlak, A. (1999). “Spacial and temporal systems in child language and thought: A cross-linguistic study.” First Language 19, 267-311.

[17] Weist, R. M., Lyytinen, P., Wysocka, J. & Atanassova, M. (1997). “The interaction of language and thought in children’s language acquisition: A cross-linguistic study.” Journal of Child Language 24, 81-121.